



日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第十七卷

河出書房版

現代日本小說大系 第七十卷

昭和二十六年十一月十日 初版印刷
昭和二十六年十一月十五日 初版發行

代著
表者

内田 百閒

發行者

河出 孝雄

編集者

伊藤 整

印刷者

小田 茂作

發行所

東京都千代田區
神田小川町一丁目八番地
株式會社

河出 書房

電話神田(25) 二三四七番
三一七四番

現代日本小說大系(龍製)
改定 定價 貳百參拾円
地方發售 貳百四拾円
河出書房

東日本印刷株式會社

目次

寺田寅彦

團栗

やもり物語

花物語

鈴木三重吉

千鳥

桑の實

森田草平

煤煙

四

八

二

三

四〇

二五

中 勘 助

銀 の 匙

二六二

内 田 百 閒

山 東 京 傳

二四四

盡 頭 子

二四六

花 火

二五〇

短 夜

二五三

件

二五九

冥 途

二六四

解 說 (伊 藤 整)

二六七

寺田寅彦

團栗
やもり物語
花物語

團栗

もう何年前になるか思出せぬが日は覺えて居る。暮も少し詰つた廿六日の晩、妻は下女を連れて下谷摩利支天の緣日へ出掛けた。十時過に歸つて來て、袂からおみやげの金鐐と燒栗を出して余のノートを讀んで居る机の隅へそつとのせて、便所へはひつたがやがて出て來て蒼い顔をして机の側へ坐ると同時に急に咳をして血を吐いた。驚いたのは當人ばかりではない、其時余の顔に全く血の氣が無くなつたのを見て、一層氣を落したと此れはあとで話した。

翌る日下女が藥取りから歸ると急に暇をくれと云ひ出した。此の邊は物騒で、御使に出ると屹度いやな惡戯をされますので、どうも恐ろしくて不氣味で勤まりませぬと妙な事を云ふ。しかし見る通り病人をかゝへて今急におまへに歸られては途方にくれる。せめて代りの人のある迄辛抱してくれと、よしやまだ一介の書生にしろ、兎に角一家の主人が泣かぬばかりに頼んだので、其日はどうやら思ひ止つたらしかつたが、翌日は國許の親が大病とか云ふ譯でとう／＼歸つてしまふ。掛取に來た車屋の婆さんに頼んで、何でもよいからと桂庵から連れて來てもらつたのが美代と云ふ女であつた。仕合せと此れが氣立のやさ

しい正直もので、尤も少しぼんやりして居て、狸は人に化けるものだといふやうな事を信じて居たが、兎に角忠實に病人の看護もし、叱られても腹も立てず、そして時にしくじりもやつた。手水鉢を座敷の眞中で取落して洪水を起したり、火燵のお下りを入れて寢て蒲團から疊まで徑一尺程の燒穴をこしらへた事もあつた。それにもかゝはらず余は今に到る迄此美代に對する感謝の念は薄らがぬ。

病人の容體は善いとも悪いともつかぬうちに歳は容捨なく暮れてしまふ。新年を迎へる用意もしなければならぬが、何を買つてどうするものやらわからぬ。それでも美代が病人の指圖を聞いて其れに自分の意見を交ぜて一日忙しさうに働いて居た。大晦日の夜の十二時過、障子のあんまりひどく破れて居るのに氣が付いて、外套の頭巾をひつかぶり、皿一枚をさげて森川町へ五厘の糊を買ひに行つたりした。美代は此夜三時過ぎ迄結び藁をこしらへて居た。

世間は目出度いお正月になつて、暖い天氣が続く。病人も少しづつよくなる。風の無い日は縁側の日向へ出て來て、紙の折鶴をいくつとなくこしらへて見たり、祕藏の人形の着物を縫うてやつたり、曇つた寒い日は床の中で「黒髪」を弾く位になつた。そして時々心細い愚痴つぽい事を云つては余と美代を困らせる。妻は其頃もう身重になつて居たので、この五月には初産と云ふ女の大難をひかへて居る。おまけに十九の大厄だと云ふ。美代が宿入りの夜など、木枯の音にまじる隣室の淋しい寢息を聞きながら机の前に坐つて、ラムプを見つめたまゝ、長い息をすることもあつた。妻は醫者の間に合ひの氣休めをすつか

り信じて、全く一時的な氣管の出血であつたと思つて居たらしい。さうでないと思ひたくなかつたのであらう。それでも何處にか不安な念が濃んで居ると見えて、時々「ほんとうの肺病だつて、なほならないと極つた事はないのでせうね」とこんな事をきいた事もある。又或時は「あなた、かくして居るでせう、乾度さうだ、あなたさうでせう」とうるさく聞きながら、余の顔色を讀まうとする、其祈るやうな氣遣はしげな眼づかひを見るのが苦しいから「馬鹿な、そんな事はないと云つたらない」と邪慳な返事で打消してやる。それでも一時は満足する事が出来たやうであつた。

病氣は少しづつよい。二月の初には風呂にも入る、髪も結ぶやうになつた。車屋の婆さんなどは「もうスツカリ御全快ださうで」と、獨りできめてしまつて、そつと懷から勘定書を出して「どうも大變に、お早く御全快で」と云ふ。醫者の所へ行つて聞くと、善いとも悪いとも云はず、「なにしろ丁度御妊娠中ですからね、此の五月が餘程御大事ですよ」と心細い事を云ふ。

それにも拘らず少しづつよい。月の十何日、風のない暖い日、醫者の許可を得たから植物園へ連れて行つてやると云ふと大變に喜んだ。出掛けるとなつて庭へ下りると、髪があんまりひどいから一寸撫で付ける迄待つて頂戴と云ふ。懷手をして縁へ腰掛けて淋しい小庭を見廻はす。去年の枯菊が引かれた儘で、あはれに朽ちて居る、それに千代紙の切れか何かで引掛けて風のないのに、寒さうに顫へて居る。手水鉢の向ひの梅の二輪ばかり満開したのがある。近付いてよく見ると作り花がくつ

つけてあつた。大方病人のいたづらしい。茶の間の障子のガラス越しに覗いて見ると、妻は鏡臺の前へ坐つて解かした髪を握つてばらりと下げ、櫛をつかつて居る。一寸撫でつけるのかと思つたら自分で新奇に巻き直すと思える。よせばよいのに、早くしないかと急ぎ立てゝおいて、座敷の方へ戻つて、横になつて今朝見た新聞をのぞく。早くしないかと大聲で促す。そんなに急ぎ立てると、なほ出来やしないわと云ふ。黙つて臺所の横をまはして門へ出て見た。往來の人がじろく見て通るから仕方なしに歩き出す。半町ばかりふらふ歩いて振り返つても未だ出て來ぬから、又引返しても來た通り臺所の横から縁側へまはつて覗いて見ると、妻が年甲斐もなく泣き伏して居るのを美代がなだめて居る。あんまりだと云ふ。一人で何處へでもいらつしやいと云ふ。まあ兎も角もと美代がすかしなだめて、やつと出掛ける事になる。實に好い天氣だ。「人間の心が蒸發して霞になりさうな日だね」と云つたら、一間ばかり後を雪駄を引きずりながら、大儀さうについて來た妻は、エ、と氣の無い返事をして無理に笑顔をこしらへる。此時始めて氣が付いたが、成程腹の帶の人が人並より大分大きい。あるき方が餘程變だ。それでも當人は平氣でくつついて來る。美代と二人でよこせばよかつたと思ひながら、無言で歩調を早める。植物園の門をはひつて眞直ぐに廣いたら、坂を上つて左に折れる。穩かな日光が廣い園に一杯になつて、花も緑もない地盤はさながら眠つたやうである。溫室の白塗りがキラ／＼するやうで其前に二三人懷手をして窓から中を覗く人影が見えるばかり、噴水も出て居ぬ。睡蓮もまだつめた泥の底に眞夏の雲の影を持つて

居る。温室の中からガタ／＼と下駄の音を立て、田舎の婆さん達が四五人、狐につまゝれた様な顔をして出て来る。余等は之と入れちがつてはひる。活力の充ちた、しめつばい熱帯の空氣が鼻の孔から腦を襲ふ。椰子の樹や琉球の芭蕉などが、今少し延びたら、此屋根をどうする積りだらうといつも思ふのであるが、今日もさう思ふ。瓜哇と云ふ國には肺病が皆無だと誰れかの云つた事を思ひ出す。妻は濃緑に朱の斑點の入つた草の葉をいぢつて居るから「オイ止せ、毒かも知れない」と云つたら、慌てゝ放して、いやな顔をして指先を見つめて一寸嗅いで見る。左右の廻廊には處々赤い花が咲いて、其中からのんきさうな人の顔もあちこちに見える。妻はなんだか氣分が悪くなつたと云ふ。顔色は大して悪くもない。急に生温い處へはひつた爲めだらう。早く外へ出た方がよい、おれはもう少し見て行くからと云つたら、一寸ためらつたが、おとなしく出て行つた。紅い花だけ見てすぐ出る積りで居たら、人と人との間へはさまつて、ちよつと出損なつて、やつと出て見ると妻は其處には居ぬ。何處へ行つたかと思廻はすと、遙か向ふの東屋のベンチへ力無さうに凭れたまゝ、こつちを見て笑つて居た。

園の靜けさは前に變らぬ。日光の目に見えぬ力で地上の凡ての活動をそつと抑へ付けてある様に見える。氣分はすつかりよくなつたと云ふから、もうそろ／＼歸らうかと云ふと、少し驚いたやうに余の顔を見つめて居たが、折角來たから、もう少し、池の方へでも行つてみませうと云ふ。それもさうだと其方へ向く。

崖を下りかゝると下から大學生が二三人、黄色い聲でアリス

トートルがどうしたとか云ふやうな事を議論しながら上つて来る。池の小島の東屋に、三十位の眼鏡をかけた品の好い細君が、海軍服の男の兒と小さい女の兒を遊ばせて居る。海軍服は小石を拾つては氷の上をすべらせて快い音を立てゝ居る。ベンチの上には皺くちやの半紙が擴げられて、其上にカステラの大きな片がのつて居る。「あんな女の兒が欲しいはねえ」と妻がいつにない事を云ふ。

出口の方へと崖の下をあるく。何の見る者もない。後で妻が「おや、團栗が」と不意に大きな聲をして、道脇の落葉の中へはひつて行く。なる程、落葉に交つて無數の團栗が、凍てた崖下の土にころがって居る。妻は其處へしやがんで熱心に拾ひはじめる。見る間に左の掌に一杯になる。余も一つ二つ拾つて向ふの便所の屋根へ投げると、カラ／＼と轉がつて向側へ落ちる。妻は帶の間からハンケチを取出して膝の上へ擴げ、熱心に拾ひ集める。「もう大概にしないか、馬鹿だな」と云つて見たが、中々止めさうもないから便所へ入る。出て見るとまだ拾つて居る。「一體そんなに拾つて、どうしよう」と云ふのだと聞くと、面白さうに笑ひながら、「だつて拾ふのが面白いぢやありませんか」と云ふ。ハンケチに一杯拾つて包んで大事さうに縛つて居るから、もう止すかと思ふと、今度は「あなたのハンケチも貸して頂戴」と云ふ。とう／＼余のハンケチにも何合かの團栗を充たして「もう止してよ、歸りませう」と何處迄もい氣な事をいふ。

團栗を拾つて喜んだ妻も今はない。御墓の土には苔の花が何返か咲いた。山には團栗も落ちれば、鶉の啼く音に落葉が降

る。今年の二月、あけて六つになる忘れ形身のみつ坊をつれて、此植物園へ遊びに来て、昔しながらの團栗を拾はせた。こんな些細な事に迄、遺傳と云ふやうなものがあるものだから、みつ坊は非常に面白がつた。五つ六つ拾ふ毎に、息をはずませて余の側へ飛んで来て、余の帽子の中へひろげたハンケチへ投げ込む。段々得物の増して行くのをぞき込んで、頬を赤くして嬉しさうな溶けさうな顔をする。争はれぬ母の面影が此無邪氣な顔の何處かの隅からチラリとのぞいて、うすれかゝつた昔の記憶を呼び返す。「おとうさん、大きな團栗、こいもくくくこいもくくみんな大きな團栗」と小さい泥だらけの指先で帽子の中に累々とした團栗の頭を一つ一つ突つつく。「大きい團栗、ちいぢやい團栗、みいんな利口な團栗ちゃん」と出たらめの唱歌のやうなものを歌つて飛びくくしながら又拾ひ始める。余は其罪のない横顔をちつと見入つて、亡妻のあらゆる短所と長所、團栗のすぎな事も折鶴の上手な事も、なんにも遺傳して差支へはないが、始めと終りの悲慘であつた母の運命だけは、此兒に繰返させ度くないものだ、しみくさう思つたのである。

(一九〇五年四月 ホトトギス)

やもり物語 ものがたり

唯取り止めもつかぬ短夜の物語である。

毎年夏始めに、程近い植物園から此わたりへかけ、一體の若葉の梢が茂り黒み、情ない空風が遠い街の塵を揚げて森の香の清い此處等迄も吹き込んで来る頃になると、定まつた様に腦の工合が悪くなる。殺風景な下宿の庭に鬱陶しく生ひくすぶつた八つ手の葉蔭に、夕闇の墓が出る頃には益々悪くなるばかりである。何をするのも懶くつまらない。過ぎ去つた様々の不幸を女々しく悔んだり、意氣地のない今の境遇に愛想をつかすのも此頃の事である。自分の様な身も心も弱い人間は、孟夏を迎ふる強烈な自然の力に壓服されてひとりでこんな心持になるのかと考へた事もある。こんな厭な時候に、唯一つ嬉しいのは、心ゆく許り降る雨の夕を、風呂に行く事である。泥濘のひどい道に古靴を引きずつて役所から歸ると、濡れた服もシャツも脱ぎ捨て、汗をふき、四疊半の中敷に腰をかけて、森の葉末、庭の苔の底迄もしみ入る雨の音を聞くのが先づ嬉しい。塵埃にくすぶつた草木の葉が洗はれて美しい濃緑に返るのを見ると自分の腦の濁りも一緒に洗ひ清められたやうな心持がする。そしてじめじめする肌の汚れも洗つて清浄な心になりたくなるの

で、手拭をさげて主婦の處へ傘と下駄を出して貰ひに行く。主婦はいつも此雨のふるのにお風呂ですかと聞くが、自分は雨が降るから出掛けるのである。門を出ると傘をたたく雨の音も、高い足駄の踏み心地もよい。

下宿から風呂屋迄は一町に足らぬ。鬱陶しい程雨側から梢の蔽ひ重なつた暗闇を降り盡して、左に曲れば曙湯である。雨の日には浴客も少なく静でよい。はひつて居る中にもう燈がつく。疲労も不平も洗ひ流して蘇つた様になつて歸る暗闇は漆の様な闇である。阪の middle 程に街燈が唯一つ覺束ない光に邊りを照して居る。片側の大名邸の高い土堤の上に茂り重る萩青芒の上から、芭蕉の廣葉が大わらはに道へ差し出て、街燈の下まで垂れ下り、風の夜は大きな黒い影が道一杯にゆれる。可成に長い此阪の凸凹道に唯一つの燈火と其まはりの茂りのさまは、唯さへ一種の強い印象を與へるのであるが、一層自分の心を引いたのは其街燈に止つた一疋の小さいやもりであつた。汚れ煤けたガラスに吸ひ付いた様に細長いからだを弓形に曲げた儘身じろきもせぬ。氣味悪く眞白な腹を照らされてさながら水の様な光の中に浮いて居る。銀の雨は此前をかすめて芭蕉の脊をたたく。立止つて氣をつけて見ると、頭に突き出た大きな眼は、怪しいまなざしに何物かを呪つて居るかと思はれた。

始めて此阪のやもりを見た時、自分はふとこんな事を思ひ出した。自分が十九歳の夏休みに父に伴はれて上京し麹町の宿屋に二月ばかり泊つて居た時の事である。とある雨の夜、父は他所の宴會に招かれて更ける迄歸らず、離れの十疊はしんとして鐵瓶のたぎる音のみ呀える。外には程近い山王臺の森から軒の

板庇を靜にそゞ雨の音も怪しい。所在なさに縁側の障子に脊をもたせて宿で借りた尺八を吹いて居た。一しきり襲ひ来る雨の足に座敷からさす灯が映えて、庭は金糸の光に満つる。恍惚として居た時に雨を侵す傘の音と軽い庭下駄の音が入口に止んで白い浴衣の姿が見えた。女中のお房が雨戸をしめに來たのである。自分は笛を下に置いて座敷にはひつた。女中は雨戸を一枚々々として行つて残る一枚を半ばで止め、暗い庭の方をちつと見て居る。自分は父の机の前に足を投出した儘で無心に華單な浴衣の後姿から白い衿頸を見上げた時、女は肩越しにチラと振り向いたと思ふ間に戸をはたとしめた。此時の女の顔は不思議な美しさに輝いて、涼しい眼の中に燃ゆる様な光は自分の胸を射るかと思つたが、纏て縁側に手をついて、宜しくば風呂を御召しあそばせと云つた時はもう平生のお房であつた。女が去つた後自分は立つて雨戸を一枚あけて庭を見た。霧の様に細かな雨が降つて居る。何處かで鬱蟲の鳴くのが靜かな闇に響く。夢から醒めたやうな心持である。戸袋のすぐ横に、便所の窓の磨硝子から朧な光のさすのに眼をうつすと、疲せたやもりが一疋、雨に迷ふ蚊を吸ふとてか、窓の片側に黒いくの字を畫いて居た。

其後田舎へ歸つてからも、再び東京に出た後も、つひ一度もやもりといふものを見なかつたが、駒込の下宿に移つて後、夏も名残の或夜の雨に此の暗闇のやもりを見つけた時、十九の昔の一夜があり／＼思ひ出された。あの後父が再び上京して歸つた時の話の末に、お房と云ふ女中は縁あつて或る大尉とかの妻になつたと聞いた。事によれば今も同じ東京に居るかも知れ

ぬ。彼は云はゞ玉の輿にのつたとも云はれようが、自分の境遇は随分變つた。假令昔のお房に再會する様な事があつても、今の自分を十年の昔豪奢を盡した父の子とは誰れが思はう。やもりを見て昔を思出すと運命のたよりなさといふ事を今更の様に感じる。そして折角風呂に入つて輕くなつた心を腐らしてしまふのであつた。

やもりは雨のふる夜毎に暗闇の街燈に出て居るが、いつ何處から這ひ上るとも知れぬ。氣を付けて居たにも拘らず一度も柱を登る姿を見た事がない。日の暮れる迄は影も見えず、夜はいつの間にか現はれてガラスに貼り付けた様に身動きせぬ。朝出がけに見るともう居ない。夜一夜あの儘に貼り付いて居たのが朝の光と共に忽然と消えるのではないかと云ふ様な事を考へた事もある。

暗闇を下りつめた角に荒物屋がある。此店は丁度自分が今の處に移る少し前に新しく出來たさうである。毎日通り掛りに店の様も見れば、又阪の方に開いた裏口の竹垣から家内の模様もいつとなく知られる。主人はもう五十を越した、人の好さうな男であるが、主婦は之れも五十近所で、皮膚の蒼黄色い何處となく險のあるいやな顔だと始め見た時から思つた。主人夫婦の外には二十二三の息子らしい弱さうな脊の高い男と、それからいつも銀杏返しに結うた十八九の娘と、外には眞黒な猫が居るやうであつた。亭主と息子は時々店の品物に溜まる街道の塵をはたいて居る。主婦や娘は臺所で立働いて居るのを裏口の方から見かける事があるが、一體に何處となく陰氣な此家内のさまは、日を経るに従つて自分の眼に映る。主婦は時々鉢巻を

して髪を亂して、如何にも苦しさに洗濯などして居る事があ
る。流し元で器皿を洗つて居る娘の淋しい顔はいつでも曇つて
居る様に思はれた。

二三ヶ月程たつて後息子顔が店に見えぬやうになつて、店
の塵を拂ふ亭主は前より忙がし氣に見えたが、それでもいつも
同じやうな柔和な顔つきで、此男のみは裏木戸に落つる梧葉の
秋も知らぬ様であつた。

やもりはもう見えぬ様になつた。冬が容赦もなく迫つて來て
木枯が吹募る或夜、散歩の歸り途に暗闇阪近くなつた時、自分
の數間前を肩をすばめて俯向いて行く銀杏返しの女がある。大
抵の店は早く仕舞つて、寂れた町に渦巻き立つ砂ほこりの中を
小きざみに行く後姿が非常に心細げに見えた。向ふから來かゝ
つた老婆とすれちがつた時、二人は急に立止つて、老婆の方か
ら、『ホー、しばらくだつたね、もう少しはいゝかえ』と聞く。
振りむいたとき見ると荒物屋の娘であつた。淋しい笑を片頬に
見せて、消入る様な聲で何か云つて居る様であつたが凄まじい
木枯が打消してしまつて、老婆の「ホー」と云つた寒さうな聲
と、娘の淋しかつた笑顔とは何かなしに自分の心にしみ込む様
であつた。暗闇阪の街燈は木枯の中に心細く瞬いて居た。

翌年の春、上野の花が散つて仕舞つた頃、或夜膳を下げに
來た宿の主婦の間はず語りに、阪の下の荒物屋の娘が亡くなつ
たと云ふ話をした。今日葬式が済んだと云ふ。氣立の優しい
よい娘であつたが、可哀相にお袋が邪慳で、折角夫婦仲のよか
つた養子を離縁した。一體が病身であつた娘は、其後段々に弱
くなつて、とう／＼廿歳でこんな事になつたと話して聞かせ

た。自分は少し前に上野で此娘に會うたことを思出した。其時
は隣の菓子屋の主婦と子供を二三人連れて、花吹雪の竹の臺を
歩いて居た。横顔は著しく瘦せては居たが、やがて死ぬ人とも
見えなかつたのである。

自分が年中で一番厭な時候が再び來て暗闇阪には又やもりを
見るやうになつた。或夜荒物屋の裏を通つたら、雨戸を明け放
して明るい座敷が見える。高く釣つた蚊屋の中にしよんぼり坐
つて居るのは年とつた主婦で、亂れた髪に鉢巻をして重い病苦
に惱むらしい。亭主は其傍に坐つて脊でも撫でて居るけはひで
ある。蚊屋の裾には黒猫が顔を洗つて居る。

やもりと荒物屋には何の縁もないが、何物かを呪ふ様な此阪
のやもりを行き通りに見、打ち續く荒物屋の不幸を見聞きする
につけて、恐しい空想が惡夢のやうに心を襲ふ。黒ずんだ血潮
の色の幻の中に、病女の顔や、死んだ娘の顔や、十年昔のお房
の顔が、呪の息を吹くやもりの姿と一緒に巴のやうにぐる／＼
めぐる。

二三日経て後の夕方、荒物屋の座敷には隣家の誰れ彼れが大
勢集つて酒を酌んで居た。疊屋も來て居る、八百屋の顔も見え
る。あかるいラムプの光は人々の赤い顔に映えて何となく陽氣
に見える。臺所では隣の菓子屋の主婦が忙がしうに立ち働い
て居る。知らぬ人が見たら祝ひの酒宴とも見えるだらう。しか
し病める此の家の主婦は前夜に死んだのである。いまはと云ふ
時に、死んだ娘の名を呼んだとも云ふ。

養子に離れ、娘にも妻にも取り残されて、今は形影相吊する
ばかりの主人は、他所目には一向悲しさうにも見えず、相變ら

ず店の塵をはたいて居る。臺所の方は近所の者などが交るゝ世話をして居るやうであつた。それから間もなく新しい女が店に坐る様になつた。下宿の主婦は、荒物屋には若い好い後家が來たと喜んで話した。自分も新しい主婦の晴れやかな顔を見て、何となく此の店に一縷の明るい光がさすやうに思ふた。

今年の夏、荒物屋には幼い可愛い顔が一つ増した。心よく晴れた夕方など、亭主は此幼兒を大事さうに抱いて店先をあちこちして居る。近所のお内儀さんなどが通りがゝりに兒をあやすと、嬉しさうな色が父親の柔和な顔に漲る。女房は店で團扇をつかひながら樂しげに此様を見て居る。涼しい風は店の灯を吹き、軒に吊した籠や箒やラムプの笠を吹き、見て過ぐる自分の胸にも吹き入る。

自分の境遇には其後何の變りもない。雨が降ると風呂に行く。暗闇阪の街燈には今でもやもりが居るが、元のやうな空想はもう起らぬ、小さな細長い黒影は平和な灯影に眠つて居る様に思はれるのである。

(一九〇七年十月 ホトトギス)

花物語

一 晝 顔

いくつ位の時であつたかには覚えぬが、自分が小さい時の事である。宅の前を流れてゐる濁つた堀川に沿うて半町位上ると川は左に折れて舊城の裾の茂みに分け入る。その城に向うた此方の岸に廣い空地があつた。維新前には藩の調練場であつたのが、其の頃は縣廳の所屬になつたまゝで荒地地になつてゐた。一面の砂地に雜草が所まだらに生ひ茂り處々晝顔が咲いてゐた。近邊の子供は此處を好い遊び場所にして柵の破れから出入して居たが咎めるものもなかつた。夏の夕方は銘々に長い竹竿を肩にして空地へ出かける。何處からともなく澤山の蝙蝠が蚊を喰ひに出て、空を低く飛びかはすのを、竹竿を振うては叩き落すのである。風のない烟つた様な宵闇に、蝙蝠を呼ぶ聲が對岸の城の石垣に反響して暗い川上に消えて行く。「蝙蝠來い。水呑ましよ。そつちの水にがいぞ」とあちらこちらに聲がして時々竹竿の空を切る力ない音がヒューと鳴つてゐる。賑やかなやうで云ひ知らぬ淋しさが籠つてゐる。蝙蝠の出さかるのは宵の口で、遅くなるに従つて一つ減り二つ減り何處ともな

く消える様に居なくなつてしまふ。すると子供等も散り／＼に歸つて行く。後はしんとして死んだ様な空氣が廣場を鎖してしまふのである。いつか塀に迷うた蝙蝠を追うて荒地の隅迄行つたが、ふと氣が付いて見るとあたりには誰も居ぬ。仲間も歸つたか聲もせぬ。川向ふを見ると城の石垣の上に鬱然と茂つた楓が闇の空に物恐ろしく擴がつて汀の茂みは眞黒に眠つて居る。足をあげると草の露がひやりとする。名狀の出来ぬ暗い恐ろしい感じに襲はれて夢中に駈出して歸つて來た事もあつた。廣場の片隅に高く小砂を盛上げた土堤の様なものがあつた。自分等は此れを天文臺と名づけてゐたが、實は昔の射的場の玉避けの迹であつたので時々砂の中から長い鉛玉を掘り出す事があつた。年上の子供は此砂山によち登つてはすべり落ちる。時々戦争ごつこもやつた。賊軍が天文臺の上に軍旗を守つて居ると官軍が改め登る。自分もこの軍勢の中に加はるのであつたが、どうしても此砂山の頂き迄登る事が出来なかつた。いつもよく自分をいぢめた年上の者等は苦もなく駈け上つて上から弱蟲と嘲る。「早く登つて來い、此處から東京が見えるよ」などと云つて笑つた。口惜しいので懸命に登りかけると、砂は足元から崩れ、力草と頼む晝顔は脆くちぎれてすべりおちる。砂山の上から賊軍が手を打つて笑うた。しかしどうしても登り度いといふ一念は幼い胸に巢をくうた。或時は夢に此の天文臺に登りかけてどうしても登れず、藻掻いて泣き、母に起され蒲團の上に坐つてまだ泣いた事さへあつた。「お前はまだ小さいから登れないが、今に大きくなつたら登れますよ」と母が慰めてくれた。其後自分の一家は國を離れて都へ出た。執着のない子供心には故郷の

事は次第に消えて晝顔の咲く天文臺も、たゞ夢のやうな影を留めるばかりであつた。二十年後の今日故郷へ歸つて見ると此の廣場には町の小學校が立派に立つてゐる。大きくなつたら登れると思つた天文臺の砂山は取り崩されてもう影もない。たゞ昔の儘を留めてなつかしいのは放課後の庭に遊んで居る子供等の勇ましさと、柵の根元にかれ／＼に咲いた晝顔の花である。

二月 見 草

高等學校の寄宿舎にはひつた夏の末の事である。明け易いといふのは寄宿舎の二階に寢て始めて覺えた言葉である。寢相の悪い隣の男に踏みつけられて眼をさますと、時計は四時過ぎたばかりなのに、夜はしら／＼と半分上げた寢室のガラス窓に明けかゝつて、覺め切らぬ眼には釣り並べた蚊帳の新しいのや古い萌黄色が夢のやうである。窓の下框には扁柏の高い梢が見えて、其上には今眼覺めた様な裏山が覗いてゐる。床は其儘に、そつと抜け出して運動場へ下りると、廣い芝生は露を浴びて、素足につ／＼かけた兵隊靴を濡らす。ばつたが驚いて飛出す羽音も快い。芝原の隅りは小松原が取り巻いて、隅の處々には月見草が咲き亂れてゐた。其中を踏み散らして廣い運動場を一圍りする中に、赤い日影が時計臺を染めて賄所の井戸が威勢よく軋り始めるのであつた。其頃或夜自分は妙な夢を見た。丁度運動場のやうで、もつと廣い草原の中を朧な月光を浴びて現ともなく彷徨うて居た。淡い夜霧が草の葉末に下りて四方は薄絹に包まれたやうである。何處ともなく草花のやうな香がするが何の匂とも知れぬ。足許から四方にかけて一面に月見草の花が咲き

連なつてゐる。自分と並んで一人若い女が歩いて居るが、世の人と思はれぬ蒼白い顔の輪廓に月の光を受けて黙つて歩いて居る。薄鼠色の着物の長く曳いた裾には矢張り月見草が美しく染め出されてゐた。どうしてこんな夢を見たものかそれは今考へても分らぬ。夢が覺めて見るとガラス窓がほのかに白んで、蟲の音が聞えてゐた。寢汗が出て居て胸がしぼる様な心持であつた。起きるともなく床を離れて運動場へ下りて月見草の咲いてゐる邊を何遍となくあちこちと歩いた。其後も毎朝の様に運動場へ出たが、此れ迄に此處を歩いた時の様な爽快な心持はしなくなつた。寧ろ非常に淋しい感じばかりして、其頃から自分は次第に吾と吾が身を削ぐる様な、憂鬱な空想に耽るやうになつてしまつた。自分が不治の病を得たのも此頃の事であつた。

三 栗 の 花

三年の間下宿して居た吉住の家は黒髪山の麓も稍奥まつた處である。家の後ろは狭い裏庭で、其上はもうすぐに崖になつて大木の茂りが蔽ひ重なつてゐる。傾く年の落葉木實と一緒に鶉の鳴聲も軒端に降らせた。自分の借りてゐた離室から表の門への出入には是非共此裏庭を通らねばならぬ。庭に臨んだ座敷の外れに三疊敷許りの突き出た小室があつて、洒落れた丸窓があつた。此處は宿の娘の居間と極つてゐて、丸窓の障子は夏も閉ぢられてあつた。丁度此部屋の上にな大きな栗の木があつて、夏初め試験前の調べが忙がしくなる頃になると、黄色い房紐のやうな花を屋根から庭へ一面に降らせた。落ちた花は朽ち腐れて一種甘いやうな強い香氣が小庭に充ちる。此處等に多い大さ

な蠅が勢ひのよい羽音を立て、此れに集まつて居る。力強い自然の旺盛な氣が腦を襲ふやうに思はれた。此花の散る窓の内には内氣な娘が垂れ籠めて讀物や針仕事の稽古をして居るのであつた。自分が此家にはじめて來たころはやう／＼十四五位で桃割に結うた額髪を垂らせてゐた。色の黒い、顔立も美しいといふのではないが眼の涼しい何處か可愛氣な兒であつた。主人夫婦の間には年老つても子が無いので、親類の子供を貰つて育て居たのである。娘の外に大きな三毛猫が居るばかりで寧ろ淋しい家庭であつた。自分はいつも無口な變人と思はれてゐた位で、宿の者と親しい無駄話をする事も減多になければ、娘にやさしい言葉をかけたこともなかつた。毎日の食事時には此娘が駒下駄の音をさせて迎へに來る。土地の訛つた言葉で「御飯お上がんなさいまつせ」と云ひ捨てゝすた／＼歸つて行く。初めはほんの子供のやうに思つてゐたが一夏々々歸省して來る毎に、何處となく大人びて來るのが自分の眼にもよく見えた。卒業試験の前の或日。灯ともし頃、復習にも飽きて離室の縁側へ出たら栗の花の香は馴れた身にもしむ様であつた。主家の前の植込の中に娘が白っぽい着物に赤い帶をしめて猫を抱いて立つて居た。自分の方を見ていつにない顔を赤くしたらしいのが薄暗い中にも自分に分つた。そしてまともに此方を見つめて不思議な笑顔を洩したが、物に迫はれでもした様に座敷の方に駆込んで行つた。其夏を限りに自分は此土地を去つて東京に出たが、翌年の夏初め頃殆ど忘れて居た吉住の家から手紙が届いた。娘が書いたものらしくつた。年賀の他には便りを聞かせた事もなかつたが、どう思うたものか、細々と彼地の模様を知ら

せてよこした。自分の元借りてゐた離室は其後誰も下宿して居ないさうである。東京といふ處は定めて好い處であらう。一生に一度は行つて見たいといふやうな事も書いてあつた。別に何といふ事もないが何處となく艶かしいのは矢張若い人の筆だからであらう。一番おしまひに栗の花も咲き候。やがて散り申候とあつた。名前は母親の名が書いてあつた。

四 凌宵花

小學時代に一番嫌ひな學科は算術であつた。いつでも算術の點數が悪いので両親は心配して中學の先生を頼んで夏休み中先生の宅へ習ひに行く事になつた。宅から先生の所迄は四五町もある。宅の裏門を出て小川に沿うて少し行くと村はづれへ出る、そこから先生の家の高い松が近邊の藥屋根や植込の上に聳えて見える。此れに凌宵花が下から隙間もなく絡んで美しい。毎日晝前に母から注意されていや／＼ながら出て行く。裏の小川には美しい藻が澄んだ水底にうねりを打つて揺れてゐる。其間を小鮒の群が白い腹を光らせて時々通る。子供等が丸裸の背や胸に泥を塗つては小川へ入つてボチャ／＼やつて居る。附木の水車を仕掛けて居るのもあれば、鹽船に乗つて流れて行くものもある。自分は羨しい心をおさへて川沿ひの岸の草をむしり乍ら石盤をかゝへて先生の家へ急ぐ。寒竹の生籬をめぐるした冠木門をはひると、玄關の脇の坪には蓆を敷き並べた上によく繭を干してあつた。玄關から案内を乞ふと色の黒い奥さんが出て來て「暑いのにより御精が出ますねえ」といつて座敷へ導く。綺麗に掃除の届いた庭に臨んだ縁側近く、低い机を出してくれ